

## ◎ 金剛寺の地蔵菩薩像

— 悠然と横たわる大江山連峰と飛仏伝承 —

金剛寺は、与謝野町最南の寺院で、その眼前には数々の伝説を持つ大江山連峰が広がっており、本寺には大江山と関係した伝承が伝えられています。

本寺の本尊の地蔵菩薩像は左手に宝珠、右手に錫杖を持った典型的な地蔵菩薩像で、平安時代後期の作とされ、当地では最も古い仏彫刻の一つと考えられています。

寺伝「本尊延命地蔵願王大士略縁起」によると、本像は元々大江山連峰の赤石岳にあ

ったとされる伝承の山岳寺院の根本寺に安置されていたが、この寺で火災があった時、直線距離にして約九百米、比高差約三百五十メートルも離れた現在の地へ飛来された、という伝承が残されています。

(与謝野町教育委員会)



- 指定状況／町指定有形文化財・美術工芸品
- 場所／与謝野町字与謝金剛寺本堂
- 製作年代／平安時代後期（推定）
- 大きさ／像高96cm
- 御開帳／25年に一度

## ◎ 石田権現いそんげんのスタジイ

—地元で愛され、守られている椎の大木—

石田権現のスタジイがそびえ

われています。

立つ丘陵は、通称「権現さん」と呼ばれ、北東方向に開けた野田川の下流域の町並みや阿蘇海、そのさらに向こうに天橋立や冠島を望むことができます。

以前この丘陵には、熊野速玉

樹勢は盛んです。

神社から勧請し祭られた速玉神社が建っていました。しかし、明治の初めには、速玉神社は木積神社境内に遷座せんざされ、当時の様子を偲おもわせるものは、石の鳥居の一部と宝篋印塔ほうくわいんとうとこの木だけとなりましたが、小字新宮の地名にはその名残があります。

かつて付近に集落があった頃の面影はなく、人里離れた静かな場所となり、木を取り巻く環境は大きく様変わりしても、京都の自然二百選に選ばれるなど、自然遺産の保護の象徴として、今も地元石田区で大切に守られています。

(与謝野町教育委員会)

明治二十九年に当地を襲った大規模な洪水によって旧境内地の大半を失いましたが、この木はかろうじて断崖の上に残り、被害を止めたご神木として地元住民の崇敬を集めたと言



- 指定年月日／昭和42年6月7日(岩滝町指定文化財)・平成18年3月1日(与謝野町指定文化財)
- 場所／与謝野町字弓木小字新宮431番地1
- 樹種・寸法／スタジイ・幹廻り5.67m 樹高約10m
- 樹齢／推定約800年

## ◎室町時代の石灯籠

四辻区にある八幡神社の長い石段を上がった右手に、石製の玉垣たまがきに囲まれた古い石灯籠があります。

この石灯籠は、高さ二百四十八チセあり、材質は安山岩あんざんがん製で、灯籠の頂部の高い請花うけばなと長い茎を持った大きな宝珠ほうじゆがかたどられているのが特徴で、「丹後型灯籠」と呼ばれます。加悦の天満神社にも丹後型の石灯籠がありますが、やや趣きが違うようです。

竿さおには刻銘こくめいがあり、『八幡宮石燈爐』『永和二二年戊午／匡頓／卯月一八日願主』と読め、永和四年（一三七八）に作られたことがわかります。

室町時代の貴重な工芸品として、昭和三十八年に国の重要文化財に指定されています。六百年を超える長い年月の間、暗闇の中、明かりを灯してきたことでしょう。

（与謝野町教育委員会）



## ◎ 天満神社の本殿 てんまん

―百三十七段の石段を登った頂上の社殿―

天満神社は加悦重要伝統的建造物群保存地区を見下ろす天神山上、丘陵東側の石段を登り切った左手に社殿が鎮座しています。

以前はこの石段の正面にあつたのですが、昭和二年の丹後大震災で社殿が崩れ、社殿の倒壊が危惧されたため、今の場所に移動されました。

本神社は加悦・算所地区の氏神で、学問の神様の菅原道真を祭神としていますが、創建から現在に至る経過には諸説があり、明確ではありません。

一説によると、

あづちもみやま  
安土桃山時代（織

田信長や豊臣秀吉が活躍した時代）

に現地に移されたとも伝えられています。また、棟札によると、大工は

とみたか 富田河内盛庸らで、享保十八年（一七三三）に建立されたことがわかります。これは本殿の建築的特徴とも一致し、今の本殿が再建された時期を示しています。

本殿は一間社流造で、龍や波間のうさぎなどの見事な彫刻が随所にみられ、組物で迫り出す技法など当地の特色がよく表れていることに加えて、屋根正面上にチヨンマゲのように唐破風からばふが付くタイプは大変珍しいものです。

（与謝野町教育委員会）



- 場所/与謝野町加悦の天神山上
- 指定等/京都府指定有形文化財・建造物・平成18年3月17日指定

## ◎ 木積神社の本殿 こづみ

— 山と緑に囲まれてたたずむ御社 —

石田地区公民館の前に建つ木積神社の石碑から右に緩やかに曲がる急勾配の坂道を登りきると、正面に鳥居が見えてきます。鳥居をくぐり抜け、境内を流れる小川を渡り、石段を登ると、急峻な山々を背にして鎮守の森に覆われた木積神社の建物が姿を現します。

木積神社は祭神に木の神として知られる五十猛神と、国造りの神、大物主神を祀り、境内社に明治治年に遷座された速玉神社が鎮座します。

神社の創立は延喜二年（九〇二）とされ、『延喜式神名帳』に記される小社木積神社に比定する説もありますが、社記・文書類を被災等で失っているため、創立・沿革については明らかではありません。現在の本殿は、神社に残る記録によると江戸時代中頃の天明六年（一七八六）に再建

されたことを伝えていきます。しかし、昭和二年の丹後震災により、大きく損傷し、昭和十五年に修理改築されました。本殿の屋根部分、桁から上の部材は古い様式を再現して作られたものであることは、部材の新しさからもうかがい知ることができます。

本殿の様式は一間社流造、こけら葺建物で、正面に軒唐破風と千鳥破風を付け、建物正面や脇障子に龍や獅子などの彫物で装飾を施すなど、丹後地方における江戸時代の神社建築の特色を表しています。古くから地元の崇敬を集めてきた木の神、国造りの神が鎮座する木積神社の社殿は、緑豊かな自然環境に守られて静かにたたずみ、訪れる人に心地よい癒しの空間を提供しています。

（与謝野町教育委員会）



### ● 場所

与謝野町字弓木小  
字宮ヶ谷

### ● 指定等

【本殿】京都府登録  
有形文化財（建造物）：平成15年3月  
14日登録

【境内】京都府決定  
文化財環境保全地区：平成15年3月  
14日決定

## ◎ 地藏山遺跡

— 中世の墓地が現存する遺跡 —

幾地区には、たくさんのお碑や五輪塔などが立ち並ぶ、中世（十二世紀～十六世紀）の墓地跡、地藏山遺跡があります。

岩屋川に向かって張り出した尾根全域が墓地になっており、尾根の前面に数十もの平らな場所を作って板碑などを並べています。板碑に彫られている仏様がたくさんある「地藏山」と呼ばれています。遺跡に立ち並ぶ石造物には、五輪塔や宝篋印塔のように形の違う石を積み重ねたものや、板碑のように板状の石に仏を



↑ 石仏や五輪塔の状況



↑ 4基立ち並ぶ五輪塔

彫刻したものなどがあります。中には文明二十八年（一四七〇）の年号のある宝篋印塔もあります。

中世のお墓がほとんど完全に残っており、たいへん貴重ということで、昭和六十二年十月十二日に町指定文化財に指定しています。

地元有志の地藏山遺跡保存会は、何十年もの間守り続けられてきた地藏山遺跡をたくさんの方に見てもらおうと、現在、もみじや山ツツジの植栽をしております。

（与謝野町教育委員会）

## ◎旧加悦鉄道二号蒸気機関車

— 加悦谷を走り続けた

国内最古級の蒸気機関車 —

江戸幕府から明治政府に政權

が遷うつされた慶応四年／明治元年

(一八六八)以降、明治政府は

欧米列強に追いつくため、さま

ざまな取り組みを行いました。

その一つが鉄道事業です。

活発な経済活動には安定した

輸送手段が必要です。明治から

昭和にかけて鉄道はその主役で

した。また、自動車普及した

現代社会でも、鉄道は私たちの

暮らしを支え続ける重要な移動・

輸送手段であることに変わりあ

りません。

さて、日本での鉄道開通は、

明治五年(一八七二)の新橋—

横浜間に始まり、関西では明治

七年(一八七四)に大阪—神戸

間が開通します。

この大阪—神戸間

用に輸入された車両

のうち、唯一現存す

る蒸気機関車が明治

六年(一八七三)に

イギリスのステー

ブソン社で製作さ

れた旧加悦鉄道二号

蒸気機関車(一二三

号機関車)です。

この二号機関車は明治七年か

ら大阪—神戸間で稼働後、大正

四年(一九一五)に島根県の簸

上鉄道に払い下げられ、大正十

五年(一九二六)には加悦鉄道

が購入し、同年十二月五日に加

悦鉄道の一番列車として当地に

汽笛を響かせ、昭和三十一年(一

九五六)まで大活躍しました。

その稼働期間は八十二年間、総

走行距離は二十九万七千八百km

(地球六周半分)。引退後も大切

に保存され、現在も世界に誇る

二号機関車として、加悦S L広

場で他の鉄道遺産とともに守り

伝えられています。

(与謝野町教育委員会)



## ●場所

加悦S L広場 (与謝野町字滝・国道  
176号線沿い)

## ●指定等

国重要文化財／123号機関車(指定名称)  
／歴史資料／平成17年6月9日指定

## ◎海を渡った青いガラス

— おおぶろみなみ  
大風呂南一号墓の出土品 —

風光明媚な天橋立とその懷に静かに佇む阿蘇海を東に見下ろす高台に十基の墳墓ふんぼから構成される大風呂南墳墓群があります。

その中で、日本で初めて完全な形で出土した青いガラスの腕輪（釧しゅ）、十三個の銅の腕輪、南西諸島からもたらされたゴホウラ貝でできた貝輪の一部、細かくきれいに磨かれた石製の首飾りなどの多彩な装飾品、十一本もの鉄剣や、やじり、ヤスなどの豊富な鉄製品を副葬した一号墓は、弥生時代後期の邪馬台国の時代に遡る丹後地方のクニの王の存在を伺わせる歴史のロマンを感じさせます。

中でも、神秘的で透明感のあるブルーの輝きを当時のままに残し、幾何学的なデザインが斬

新さを感じさせるガラス製の腕輪は、直径九・七cmをはかり、透き通った内部をのぞき込むと、細かな気泡を閉じ込めた海の一部を思い浮かべさせるような不思議な魅力を持っています。

日本海を通じて大陸と交流をもった弥生時代の丹後の王は、遠い水平線の向こうからもたらされた神秘的なガラスの輝きに何を感じていたのでしょうか。

（与謝野町教育委員会）



大風呂南1号墓出土のガラス釧と銅釧の一部

●指定等／国指定重要文化財・平成13年6月22日指定・考古資料・弥生時代前期



## ◎雲岩寺の宝篋印塔

ほうきょういんとう

— 京都府内最大級の宝篋印塔 —



↑ 岩屋の雲岩公園にある雲岩寺の宝篋印塔

府内でも最大級のもので、笠の隅飾りの反り具合からも力強い鎌倉時代後期の様相を示しており、中世の雲岩寺を示す貴重な文化財として、昭和六十二年に町指定文化財に指定されています。

また、雲岩寺に残る石灯笼の竿部に「永仁二年」（一二九四）の年号が刻まれており、一説にはこの宝篋印塔と並んで立っていたとされています。

雲岩寺（当初は雲巖寺と記す）は、鎌倉時代から室町時代に繁栄した寺で、その痕跡として、現在でも建物跡の礎石群や仏像、石造物を見ることができず。

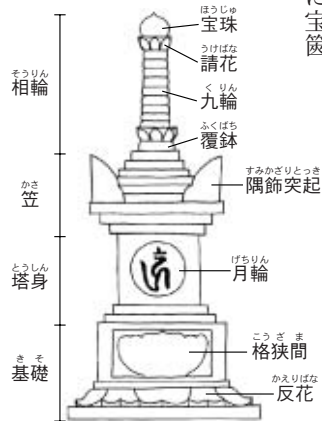
今の時期は、山も色付き、さわやかない季節です。雲岩公園の山へ登って、是非大きな宝篋印塔をご覧ください。

（与謝野町教育委員会）

中でも、頂上付近にある宝篋印塔は高さが三メートル以上もあり、大変目をひきます。

宝篋印塔とは、塔身に宝篋印陀羅尼経を納めたことからその名が付けられています。供養や墓碑として立てられました。総高は三メートル三十六センチあり、京都

図説◎宝篋印塔



## ◎須代神社の木造神像と木造狛犬

— 信仰されるものとそれを護衛するもの —

赤ちゃんのお宮参り、稚児

の七五三、新年の良き事を願う初詣。これらだけでなく、

人々は生活の節目には神社に足を運び、ある時は願を掛け、ある時には感謝の気持ちを伝え

ます。今紹介する須代神社の神像と狛犬は数少ない木造品で

す。鎌倉時代（十三世紀）の作とされています。この他に、与謝野町内の木造神像では平安時代（九〜十二世紀）の作とされる男山地区の板列八幡神社の木造女神像（国重要文

化財）があります。

木造狛犬では、石川地区の大宮神社と加悦地区の天満神社に室町時代（十四・十五世

紀）の作と考えられているものがあります。おそらく他の神社にもあったのでしょうか、木造品のため伝世しなかった

のでしょう。人の願いを聞き続け、人の暮らしを心から支え続ける神像とそれのお供の狛犬の役割は

これからも変わることはありません。（与謝野町教育委員会）



明石の須代神社には、神像が4体、狛犬が1体あります  
①～④木造神像  
⑤木造狛犬

- 場所／須代神社（字明石）
- 指定等／与謝野町指定文化財・彫刻（昭和57年6月10日指定）